

ニューヨークの中の日本人（その三）

——子どもの世界——

佐藤 奈美子

P・S・220

P・S・220 QUEENS（クウィーンズ区立第二二〇小学校）が、子ども達の通った学校です。一学年三一四クラス、一クラス二十五―三十五人、それに養護学級と幼稚園四クラスの小さな学校でした。通学していた子ども達は、アメリカ人の他にも、中南米諸国、ヨーロッパ各地、そ

れに中国、インド、韓国、アジアの国々か

らの移民の子弟も多く、日本人は最も多い時には二十名近く在籍していました。校区内には黒人は住んでいませんでしたが、スクールバスで他区から通って来る子ども達がいきました。何をもってアメリカ人と定義するのか分からなくなってしまふのですが、この小さな学校では、いろいろな国の文化を背負った子ども達が仲良く机を並べて、アメリカの教育を受けていたと言えそうで

す。

この学校では三年半の間に、三人がかりで幼稚園から五年生まで、途中でクラスを変った事をも入れると、全部で十のクラスで学んだ事になります。

今でこそ、オープンエデュケーションと言う言葉はさほど耳新らしいものではありませんが、私が初めて出喰したのは、この学校での事です。ここでは、オープンクラスとして、よく話題になりました。そして

それはこの学校でも、まだ新しい試みであつたようでもありません。

見慣れない授業風景に加え、一九七五年

のニューヨーク市財政難の頃には、多数の教職員が解雇になり、授業内容が変わったり、時間短縮になったりと変動も激しく、なかなかその正体がかまいませんでした。

当時、P・S・220には、オープンクラスもあれば、一斉授業のクラスもあるとの事でしたが、三人の学んだクラスは全部オープンクラスと呼ばれるものでした。それで、この学校で見聞した事が、オープンクラスゆえのものだったのか、それとも、アメリカの教育が、そもそもこう言うものだったのか、区別することが出来ません。又、学校によってもオープンクラスの学校、そうでない学校といろいろで、P・S・220がニューヨークの学校を代表すると言う訳には行かないようです。けれどもごく当り前の公立小学校であつた事も事実

なのです。

幼稚園

ニューヨークでは、公立小学校には、キンダーガーデンと呼ばれる幼児部が附属しています。

新学期は九月から始まり、一学年は普通その年の一月一日から十二月三十一日までの間に生まれた子ども達で構成されます。ニューヨーク市では、義務教育年齢は七歳からですが、その年のうちに五歳になる子であれば、キンダーガーデンに入学が許可されます。私達の住んでいた辺りでは、三・四歳になると私立のナーサリースクール、五歳になると公立のキンダーガーデン六歳からは小学校と言うのが最も一般的でした。

学年末の近い五月になると、学校へ登録をし、簡単な面接試験、一日入学、カリキ

ュラム説明会などがあつて、九月、小学校が始まると同時に、キンダーガーデンも始まります。

盛大な卒業式が行なわれるのに反し、アメリカには入学式なるものがあるのかどうか、少なくともP・S・220では一度も経験した事はありません。入園入学の為の特別の準備も無し、それでも、ナーサリースクールの時にくらべれば、まだいくつか準備の物があります。はさみ、のり、クレヨン、それらを入れて置くコーヒーマグの空缶。それにお絵画きの時のスモック。これはお父さんのワイシャツのお古、小学校に上った時にはこの他に、ノート、えんぴつ消しゴム、それに布製のランドセル。ニューヨークの子ども達はとても質素です。キンダーガーデンは、四つのクラスが午前十と午後の二クラスずつに分かれており、バス通学区域にあつた私の所では、いつも午前中のクラスでした。キンダーガーデン

と言っても、小学校と同じ校舎の中にあり、庭も校庭の一隅。ここは小学校の運動場とは金網で柵をされていますが、街の人達も自由に使える公園にもなっています。木蔭にはチェス台もあり、老人や、赤ちゃん連れの若いお母さんがベンチに腰かけて、子ども達の遊ぶのを眺めている光景がよく見られました。

部屋の中は次の九つのコーナーと、真中の広い部分に分かれています。

- ① ままごと遊び、大工仕事をするウエンドイコーナー。
- ② 算数教材のあるマース・コーナー。
- ③ 町の模型、ミニカー等で遊ぶソウシヤルスタディのコーナー。
- ④ 大小様々のブロックのあるブロックスコーナー。
- ⑤ 金魚やハムスター、磁石などの置いてあるサイエンスコーナー。
- ⑥ 流し台、イーゼルのあるアートコーナー

1。

⑦ 絵本やカードが揃っていて、言葉の勉強をするランゲイジアートのコーナー。

⑧ パズルやゲームのあるゲームコーナー。

⑨ 本を見ながら、ヘッドホンでお話を聞くリスニングコーナー。

子ども達は、毎朝学校に着くと、まずその日のプランを決めます。前記の九つの作業の中から三つを選ぶのです。これは直接先生から指導を受ける以外の、いわゆる自由時間のプランです。壁の一隅に、このプランを貼っておくコーナーがあつて、子ども達は一つの作業が終わる度に、うまく出来ると笑い顔、そうでない時には渋い顔を描き込むようになっていきます。

一クラスは二十数名の子ども達と、担任、助手の二人の

Name / I / P / r / a / s / h / i		😊	☹️
	Wendy Corner	😊	☹️
	Math	😊	☹️
	Social Studies	☹️	☹️
	Blocks	😊	☹️
	Science	😊	☹️
	Art	😊	☹️
	Language Arts	☹️	☹️
	Games	😊	☹️
	Listening Corner	😊	☹️

先生。九時から十一時半までを三十分毎に区切り、二人の先生はグループや個人の指導。その間、他の子ども達は、自分のプランに従って、そのコーナーで自由遊び。ちよつとでも大声を上げたり、走ったりすると、すごい声で叱られますので、自由に遊んでいるにしては、とても静かです。

前回でもふれましたが、キンダーガーデんでも、言語指導に力が入れられており、先生との学習の時には、ほとんどが文字や言葉の勉強です。すでにワークブックが用意されており、それは段階を追って小学校

の一年二年へと進みます。算数の勉強もこの時から開始され、これも小学校へと続いて行くワークブックの第一冊目が与えられます。英語、算数の勉強に比べると、絵や工作はまだしも、音楽となると全くおそまつで、楽器の演奏など皆無。この傾向は小学校についても同じで、それでも、週一度でも、音楽の先生による音楽の授業のあったこの学校は、まだまだだったかもしれせん。

オープンクラス

始めて小学校の授業参観をした日、教室に入ったとたん、とまどってしまいました。机はあっち向き、こっち向き。立ち歩いている子あれば、教室の隅っこでは床にあぐらをかいて本を読んでいる子もいます。先生は、丸く輪になった五・六人の子ども達の中。そこでは本を読んだり、話し

合ったり、手が上ったり。別のコーナーでは、若い助手の先生が、ひとりの子どもに算数を教えています。時々トイレに立つ子ども、他の先生に呼ばれて教室をぬけ出して行く子、帰って来る子。直接先生が指導に当たっているグループなり、個人なりは、三十分毎に次々に変わりますが、その他の時間を子ども達は自習のような形で学習をしています。三十人程の子ども達が、二人の先生の元ではありますが、それぞれ異なる学習を順序よく進めて行く様子には、びっくりしてしまいました。

P・S・220のオープンクラスでは、机や書棚の配置によって、室内がいくつかのコーナーやグループに分けられています。一応自分の机は決まっていますが、学習内容によって、しょっちゅう他の場所へ移動します。学年が進むにつれ、室内のコーナーの数は減り、図書室、メディアセンター、その他の特別教室へ行く事が多くなっ

て来ます。一クラス全員が揃って行く時間もありませんが、日本とはちがうなと思うのは、個人なり、グループなりで出たり入ったりしている事でした。それで授業中とは言い、流動的な感じがします。

小学校に上っても、子ども達は毎朝自分でその日のプランを立てます。学年、クラスによって形式はいろいろでしたが、低学年の時はその日一日だけのもの、三年生からは、毎朝立てるのはその日の分だけですが、一週間単位で表になっていて、一週間経つと、どの課目がどれだけかどったか分かるようになっていきます。先生が直接指導して下さる学習、特別教室での学習等はあらかじめ曜日と時間が決まっています。残りは自分で学習を進めて行くと言う訳です。

教師側には、それぞれの指導計画がある事と思いますが、意欲ある子はどんどん進

む事が出来る反面、やる気が無ければ遅れてしまう事にもなりかねません。実際、同じクラスの中でも、リーダーや、ワークブックなど、子どもによって進度はまちまちでした。

ふだんカバンに入れて持ち運びしているものと言えば、ノート、えんぴつ、宿題の紙くらい。教科書、教材は学校備え付け。英語や算数のワークブックも、ふだんは学校に置きっ放しで、やり終えてから持ち帰って来ます。家ではわずかの宿題をするだけ。それも土、日はじめ、祝日、夏休みなど休日には出されませんから、子ども達も勉強とは学校でするものと思っていたようです。

教科書と言っても日本とは全く異なり、百科辞典か参考書のように、実際そのようない方がされてきました。

例えば、社会科で、新大陸発見の頃を学ぶ学年では、先生の方から数名の探検家と

研究項目を上げたプリントが配られ、子ども達は自分のやりたい人物を選び、研究項目に従って、教科書や、図書室の本で調べ、レポートを書きます。それを発表し合った後はテストです。共通問題もあります。が、選択問題もあるので、自分の得意とする所を解答すればよい訳です。

英語にも、日本のような教科書が無い代わり、言葉の使い方をリーダーやワークブックで学ぶ一方、一年生の時から読書ノートと言う形で、図書室の本を読みながら、単語や要約の仕方、感想文の書き方を学びます。

三年生になると、それまでのワークブックに代わって、カードによる学習が始まります。算数でも英語でも、先生から新しく習った後は、段階順に問題のっているカードで問題をこなして行きます。お互いに調べ合ったり、教え合ったりする相手が決まっています。まず友達同志で、それでも分

からなければ先生に教えて頂く、と言う方法がとられていました。

日本ではあまり見かけない科目の一つに、カレントイベントがあります。学校では主として政治問題をスライドで見ながら勉強するのですが、宿題として、新聞記事を切り抜き、それについて要約したり、意見を述べたり、大人の新聞の中から、子どもに分かりやすい記事を選ぶのは大変でした。それでも低学年のうちは、写真の切り抜きに、簡単な説明をつけるだけでしたし、三面記事でも良かったのですが、学年が進むにつれ一面記事、それも学校で学習した事に関係あるものとなって来ると、私もお手上げ。それで近所のお友達と一緒に、彼女のお母さんに助けてもらっていた訳ですが、そのお母さん、私の小さい時にも、窓の開いた新聞にいつもお父さんが困っていた、との事でした。

五年生になった時には、クラスで何部か

ニューヨークタイムスを取り、授業に使っていました。大統領選挙のあった年には、学校中で、フォードかカーターかと選挙をしたそうです。

能力別クラスとスキップ制度

何を基準として、能力が計られているのかよく分かりませんが、P・S・220では、クラス分けは能力別になっているとの事でした。浩史は一年生になって一か月程経ったある日突然、隣りのスマートクラスに入る事になりました。真由美がそれまでのミッドルクラスから、スマートクラスに入ったのは五年生からです。

学期の途中でクラスを変わると言うことは、この学校ではさほどめずらしい事ではありません。真由美も一年生の前半を終えた二月初め、英語で理解出来るようになる、元来の学年である二年生に進級しまし

た。これはスキップと呼ばれる制度で、英語にハンディキャップのある日本人にはよくあるケースでした。こうした特殊な場合を除いても、本当によく出来る子はスキップをして上の学年に進んで行き、反対に、出来なければ落第させられる事もしょっちゅうでした。

真由美が五年生になってスマートクラスに入った時、最初慣れるまで大変でした。算数、英語の内容もむずかしかった上に、スマートクラス特別の科目があつて、理科、社会、図工、音楽など、研究レポートを出す事が多くなったからです。いつも何かテーマをかかえ、本を読んだり、観察したり、作品を作ったりと、レポート作りを追われていた感じです。こうなると、家へ帰つて来ても、遊んでばかりは居られなくなりました。こういう学習は数人のグループ毎に、専門の先生の元でも行なわれ、順番に交替して行つたようです。

特別指導とミーディアセンター

P・S・220には、図書室とはアコーディオンカーテンで仕切られた、ミーディアセンターと呼ばれる広い部屋がありました。ここには、カードを差し込むと絵や文字の現われるテレビのような機械、ヘッドホンでテープを聞く機械などが備え付けられ、専属の先生から、それらの機械を使って指導を受けます。この部屋と設備とは、この学校を特色づけている物の一つだったらしく、父兄にその授業を公開して、説明会が催された事もあります。この部屋には、クラス全員でやって来て学習する事もあれば、個別に来る事もありました。機械を操作しての学習は、テレビゲームの感ありですし、映画を見ている気分になる物もあります。内容も、言葉の学習だけでなく、算数、理科、社会科など広範囲に渡

り、子ども達はこの部屋へ行ける日が、とても楽しみだったようです。

担任の先生が指導して下さる教室内での授業の他に、このミーディアセンターや、他の特別教室で、専門の先生による特別指導もありました。その中には、日本人の子ども達に英語を教えて下さった、サラ・春山先生の授業もあります。P・S・220には、従来外国人の子ども達に英語指導する専任の先生が居られますが、日本人の多かった一九七三年前後の数年間、日本人の為に春山先生が臨時講師として赴任されました。その様子を一度参観させて頂いた事があります。

ミーディアセンターの一隅にデスクのあった先生の所では、二・三人のグループで、日本人の子ども達が三十分ずつ、絵本やカードで英語の勉強をしていました。

同じ時、他にも何組か学習。

ミーディアセンターの先生と、助手の先

生の元では、黒人の子どもばかり七・八人が、本や機械を使って言語学習。これは、黒人の中には正しい英語の使えない子どもがたくさん居るからとの事でした。

他に二組、一対一での学習。これはお母さんのボランティアで、遅れている子どもの指導との事。スクールマザーと呼ばれ、ランチルームや図書室で手伝っているお母さんの姿もよく見かけられたのは、財政難ゆえなのか、ボランティア精神ゆえなのか。この他にも、「今日は〇〇ちゃんのお父さんが来て、フランス語教えてくれた」とか、「日本人のおばさんが来て、折紙教えてくれた」とか。父兄も直接教育に参加していた、と言う感じでした。また、いわゆる英才教育と言われるものや、希望者なら誰でも参加出来る、課外活動としての、体育、音楽、図工などは放課後に行なわれました。

おわりに

個人を大切にし、個性をのばそうとする教育。自分で考え、得ていった知識。けれども言語指導重視の陰で、憂き目にあっていた理科や体育、音楽など。良きにつけ、悪しきにつけ、この人種のルツボのような学校の中で、自分達も又日本人と言う一族として、学び、帰国していった日本の子ども達。帰国して、日本の公立小学校に通い始めた真由美は、しばらくしてこんな感想をもらいました。

「日本の学校は、みんなが同じ事を習っているし、先生が何でも説明して下さるから楽なんだけど、忙しくて、忙しくて疲れてしまう」と。

好きな物が食べられるけれど、材料集めや料理までしなければならぬのは大変だった。けれども、栄養満点の大ごちそうを、好き嫌い言わず、どんどん食べねばならないのも、しんどい事だと言うのでしよう。

(おわり)